

Special Interview

スタッフの生の声を聞くインタビューコーナー。
どのような経験を経て今に至り、
現在、どのような思いを持っているのかを聞いてみました。

描きたいと思ったものは、全部描け。
それが美術道の始まりよ(笑)



絵画教室講師・大学院生 笠松 芽依 KASAMATSU MEI

宮城県出身。東京造形大学の大学院に在籍中。
鉛筆画を得意とし、緻密でリアルな描写を得意とする。
プロとしての活動準備に携わりながら、株式会社サウ
ザンドデザインの絵画教室の先生として活躍中。親し
みやすい人当たりと、真面目さが共存する人気の先
生。絵を描く上での技術的な引き出しをたくさん持って
いるので、疑問点があれば詳しく聞いてみよう。

美術が好きすぎる 大学院生

編：今は大学院生ですか？
山本：はい、東京造形大学の美術研究領域というコースで大学院生をしています。生まれは仙台で、大学進学と同時に上京しました。
編：仙台ではどんな子供でした？
笠松：とにかく絵と書道が好きで、自分から習い事をしたいと親に頼んで通い始めました。両方とも好きでしたが、絵画教室は姉がやっていたので、その影響があったのかもしれない。絵は見た写真や実際のものを写実的に描くことが好きでした。絵も書道も、自分が思う綺麗なものを描き出すことに興味があったのだと思います。
編：絵画教室ではどんなことをやっていたのですか？
笠松：基本的には絵を描くのですが、瓶にお題が書いてある紙が貼まっていて、そこからくじ引きのように引いて、自分が描くテーマを決めるというやり方がありました。内容も面白くて、「ペンの中の世界」とかが書かれています。見て描くというよりはイメージネーションで描く感じですね。
編：見て描くのが得意な子と、想像して描くのが得意な子がいますよね。
笠松：そうですね。想像して描くのが得意な人に対して思うのは、二つの環境に恵まれていたのかな、ということですね。ひとつは「誉められること」、もう一つは「いろいろなものをインプットする」ということ。
編：環境がそろえば誰でもイメージネーションを発揮できるかと？

笠松：そう思います。インプットとアウトプットの熟練度によるかと。ただ、努力して身につける人と、まったく苦しまずに自然にできちゃう人がいて、後者の人は「センスがある」と言われるのかもしれない。私はいままではそれほど苦しまずに想像して描くことができていたのですが、最近は苦しむようになってきました(笑)。

少女時代

編：どんな学生時代でしたか？
笠松：本中学では吹奏楽部でフルートを吹いてました。でも音楽は…難解過ぎたというか、自分の手でどうしようもないというか、自由度が低い気がして…絵画や書道に比べるととても。技術が上がれば少し解消されたかもしれませんが、高校は普通科で2年生から美術予備校に通ったので部活はしていませんでした。
編：大学はどうやって決めたのですか？
笠松：とにかく美術が好きで、将来の仕事がどう、ということより、「ただ美術をやりたい」という思いだけでした。決めたと同時に美術予備校に通いましたね。高校2年生の最初です。予備校は「仙台美術予備校」でした。そこは東北で一番大きいと言われたところで、青森から通ってくる子もいたほどです。*1

編：楽しかったですか？

笠松：そうですね。ひたすらモチーフを再現する授業で、純粋に腕が鍛えられたと思います。

編：学校はどうやって選びましたか？

笠松：造形大学はとにかく先生との距離が近いのが魅力でした。他の大学では考えられないくらい、「一日中先生と会っていられる、みたいな。オープンキャンパスや、先輩の体験談などからそれを聞き、「ここ」と思いました。他は眼中になかったです。
編：大学を美大にしたことで、「両親から反対はされませんでしたか？」
笠松：んー、「就職はどうなるのかな…」といった心配はされましたが、その時はしっかりと答えを示せませんでした。でもそうはいいつつ、快く承諾してくれました。

編：実際に入学してみようとしたか？
笠松：めちゃくちゃいいです。教授陣はただ美術のスキルアップだけではなく、ありとあらゆる相談のつてられて、充実しています。あとはもう、好きなことをさせてくれるという感覚です。アトリエも使い放題だし。

コロナ直撃の大学生活

編：笠松さんはどんなことをやったのですか？
笠松：私は鉛筆画を中心にしていました。コロナ真っ最中だったので、2、3年生の時はほぼ学校に行けませんでした。コロナ明けですぐ卒業制作に入った、というイメージです。
編：コロナ期間中は大学に行くことができなかったのですか？
笠松：来て(教室を使って)もいいよ」といったスタンスだったように記憶しています。制作の内容によっては学校の機材を使わせてもらわないと完成が難しいものもありましたし、ただ、当時はSNS等で「学費を返してほしい」といった声がたくさん上がっていたのを覚えています。署名活動とかもあったはず…まあ、学科などはオンラインで授業がありました。

編：それでも楽しかった？

笠松：はい、そうですね。得られるものが多かった、という感覚です。自分の制作や他の学生や教授たちの「コミュニケーション」ひとつひとつが、自分にとって刺激的でした。

芸術家としての将来

編：卒業後のことをどう考えていますか？

笠松：実は最近、全く(美術と)関係ない仕事をしつつ、(趣味として)絵画を続ける、という生き方もありだな、と思うようになってきました。

プロ…どこからプロと呼ぶのか曖昧ですが、制作を続けたいという気持ちが大き過ぎて、お金の面で悩むのは辛いと思います。ちょっとずつでもしっかりと続けたい。フリーターしながらプロを目指す、という道もあるとは思いますが、ただ、バイトを3つくらい掛け持ちして、常に家賃の支払いに追われながら、画材とかもお金と相談しながら考えて…。

編：そういう生き方をしている人もいらっしやいますね。

笠松：はい。デザイナーだったり、アニメーターだったり、といった美術に関わるバイトをすることを考えると、(本当にやりたいことと違つので)そちらの方が辛いかもしれない、という思いもあります。いっそのこと全く関係のない仕事の方がいいのかもしれない。ただ、それもまだ選択肢の一つということなので、そこまで本気で考えているわけではありません(笑)。

編：絵の世界でプロになるには具体的には何をすればいいのでしょうか？

笠松：現実的に考えると、一番手っ取り早いのは公募に参加するということです。*2
編：公募というのは？

笠松：CAF*2だったり、FACE*3だったり…それで賞を取れば、自分のキャリアになるし、ギャラリーから声がかかることもあります。

編：ギャラリーから声がかかるのですか？

笠松：いきなり「うちに所属しませんか」とはなりません。うちで展示しませんか」といったところから始まり、関係性ができる場所、という形になるケースが多いように思います。そうなればギャラリーが作家を管理してくれて、宣伝などもしてくれるようになります。

編：笠松さんはプロになるためにどういうことをしているのですか？

笠松：個展を企画しています。貸しギャラリーと「マーシャルギャラリー」があつて、前者は場所を提供してくれるところで、後者はバイヤーとの人脈があり、宣伝なども協力してくれれます。

編：後者の「マーシャルギャラリー」と一緒に企画した方が将来的にみて良いのでは？

笠松：そうですね。きちんと選ばないと、非常に不利な条件を飲まなくてはいけない場合もあるようです。駆け出しの作家は貸し画廊が良いと思います。

編：絵が好きで子供たちに向けて、何かメッセージはありますか？

笠松：描きたいと思ったものは、全部描け」ということでしょうか(笑) 上手く描けばもちろん自分も嬉しいし、他人からも誉められると思います。上手く描けなくても、新しいものが自分の中に入ってくるので、それがたくさんあればあるほどいいです。美術系の仕事と絵画教室が圧倒的に違うのは「コミュニケーション」だと思っています。その生徒さんとの間で作品が出来上がっていくその「場」そのもの…お金をいただいているのはその「楽しかった経験」の対価だと思っています。小さい時にそういう経験をすることは、その先がめちゃくちゃ長いので、とても良いことだと思っています。

編：ありがたうございました。

絵画教室について

編：絵が好きで子供たちに向けて、何かメッセージはありますか？

笠松：描きたいと思ったものは、全部描け」ということでしょうか(笑) 上手く描けばもちろん自分も嬉しいし、他人からも誉められると思います。上手く描けなくても、新しいものが自分の中に入ってくるので、それがたくさんあればあるほどいいです。美術系の仕事と絵画教室が圧倒的に違うのは「コミュニケーション」だと思っています。その生徒さんとの間で作品が出来上がっていくその「場」そのもの…お金をいただいているのはその「楽しかった経験」の対価だと思っています。小さい時にそういう経験をすることは、その先がめちゃくちゃ長いので、とても良いことだと思っています。

編：ありがたうございました。

編：卒業後のことをどう考えていますか？

笠松：そうですね。得られるものが多かった、という感覚です。自分の制作や他の学生や教授たちの「コミュニケーション」ひとつひとつが、自分にとって刺激的でした。

編：卒業後のことをどう考えていますか？

笠松：そうですね。得られるものが多かった、という感覚です。自分の制作や他の学生や教授たちの「コミュニケーション」ひとつひとつが、自分にとって刺激的でした。

編：卒業後のことをどう考えていますか？

笠松：そうですね。得られるものが多かった、という感覚です。自分の制作や他の学生や教授たちの「コミュニケーション」ひとつひとつが、自分にとって刺激的でした。

編：卒業後のことをどう考えていますか？

笠松：そうですね。得られるものが多かった、という感覚です。自分の制作や他の学生や教授たちの「コミュニケーション」ひとつひとつが、自分にとって刺激的でした。

編：卒業後のことをどう考えていますか？

笠松：そうですね。得られるものが多かった、という感覚です。自分の制作や他の学生や教授たちの「コミュニケーション」ひとつひとつが、自分にとって刺激的でした。

編：卒業後のことをどう考えていますか？

笠松：そうですね。得られるものが多かった、という感覚です。自分の制作や他の学生や教授たちの「コミュニケーション」ひとつひとつが、自分にとって刺激的でした。